
魔女と笑劇

398

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女と笑劇

【著者名】

N5002BA

398

【あらすじ】

他サイト頂の鶴にも掲載有

何時のことだったか忘れてしまったけれど、見知らぬ女の子に「貴方が欲しい」と言われた。真紅の頭巾を被り、俯く彼女の顔は黒いシミに覆われていて表情をることはできない。そんな人を初めて見た僕は幼い子供心に、何を言い出すのだろうかこの不気味な女の子は、と思った。そして「僕は誰のものでも、ましてや物でもないからあげることなんてできないよ」と冷静に答えた。すると彼女は「貴方が何を言おうと、私は貴方が欲しいのよ！」と、酷く怒ってしまった。どうやらその女の子は世間一般的に『魔女』と呼ばれ、疎まれている子だつたらしく、彼女は僕に死ぬまで付き纏う呪いとヒトならざる力を僕に与えて文字通り僕に『成り代わった』。

何処か見知らぬ場所に捨てられるわけでもなく、自分の体に居なくてはいけない僕にとって『魔女』にかけられたその呪いは『魔女』にとつての戒めで。成り代わるという行為は『魔女』が生きる為の術でしかなくて。それに気付いたのは『彼女』が僕の自我に消されてからしばらく経つた後だった。

基より形などない『魔女』は誰に対しても偽りを言い、自分一人だけが利益を得るために何よりも冷酷になり、自分が持ちえないものを他人が持っていたら嫉妬する。『魔女』はそんな単純な人だつたけれどそこには必ず一つの願望が付いてきていた。

それは、「人間の心理」について知ることである。

月明かりが微かに入る部屋の中、熱がじわじわと私の身体を侵食してゆく。風邪にもよく似た、だけど決して風邪などではない何か別の症状になつて、もう何日日だらう。皆すぐに治るよ、と言つていたのに一向に治る兆しが見えてこない。私だって皆みたいにお日さまの下で遊びたい。皆ともっと仲良くなりたい。でも、それは叶わない。どうして私はこんな特異な病氣にかかりてしまったんだろう。一人悲観しながら小さく咳をすれば、不意に部屋の扉が音を立てずに開かれた。

そこから現れたのは私より少しばかり小さな男の子。もしかしたらこの村に住んでいる子なのかもしれないけれど、私はこんな子を知らない。でも、何だか仲良くなれそうな雰囲気を持った子だなあと感じた。

「さつとみんなが嘘ばかり言つ世界があつたら、それは不幸でしかないんだと僕は思うよ」

この男の子は一体何を言い出すのだろう。部屋の扉を閉める音や足音さえも立てず、私が寝ているベッドの隣にやつてきた彼は私の方をじろりと見おろした。その眼は僅かな月明かりの中でも分かるぐらいの綺麗な水色で、私は羨ましいと思つてしまつ。だって空の色と同じ水色とずっと一緒にいられるなんてとても嬉しいことじゃない?

「どうしてアナタはそう思つの」

彼が初めに問い合わせてきた質問にそう返せば、その男の子は「そんなことも分らないの?」と怪訝そうな顔をして私を見つめる。けれど、私には彼の言った言葉の意味が理解できなかつたんだから、そんな目をしなくなつていいじゃない。だつて私はこの世界には、吐いて良い嘘と、吐いてはいけない嘘があることぐらいしか知らないんだもの。

「嘘を吐きすぎると時には人の気持ちを麻痺させるからね……。君たちを見ていると僕はそんなふうにしか思えないんだ」

諦めを含んだことを言つてからその子は目を細め、「返事はいらないよ」と言つようく私の頭をクシャリと撫でた。彼のその手はひどく冷たくて一瞬『怖い』と思つてしまつたけれど、その冷たさが私の身体に溜まっていた熱を確実に奪つてくれて、少しだけ安堵してしまつ。

ああ、久しぶりに感じる自分自身の正しい体温。憑き物が落ちたみたいに軽くなつた私の身体。それに安堵した私は瞼を静かに降ろした。

「明日には今までのことが嘘みたいに元気になつていい

その言葉にハツと瞼を開ければ、そこにはニコリとも笑わず、すぐには私の側から離れて部屋から出て行こうとする彼の姿があつた。月明かりぐらいしか入つて来ることのない静かな部屋に一人で取り残されることが寂しく感じられ、思わず私は「待つて」と彼を引きとめてしまう。もしかしたら、私の言葉を聞かず出て行つてしまふかもしれない。そんな不安を私は感じていたけれど、彼はすぐにピタリと止まってくれた。しかし決してこちらを向いてはくれない。どうしての方を見てくれないの。そう言いたかつたけれど、私の

口から出たのは「アナタの名前は何?」という言葉だった。きっと、名前を知つていれば村の中で彼のことを探せるだろつと思ったからなんだろう。けれど彼は名前を教えてはくれず、唯「僕は『魔女』だよ」と言つて私の居る部屋から音を立てずに出て行つてしまつた。

私の部屋からよく見える真っ暗な森には、ヒトならざる力を得た『魔女』がいるから森に入つてはいけないよ、と村に住む大人たちが口々に子供に諭している。けれど、そんな『魔女』だなんて非科学的な人間が存在するわけがないじゃない。それにヒトならざる力を得たと言うならば、それはもう『ヒト』なんかじやないでしょう？ それは皆も知っている筈なのに、どうして森の中に『魔女』が居ると私たちに諭すのかしら。

それほど良くもない自身の頭で考えても、暗くて光など一切入らない森が怖いからや、森に住む獣たちが恐ろしいから、などという幼稚な理由しか浮かび上がらない。私が持つ疑問に頻繁に答えくれる父さんは、人が何かを恐れる理由を「人間はその物事を知らないから恐れるのであって、知つてしまえば恐れはしないんだよ」と教えてくれた。だから、きっと私の知らない何かを村の大人们は知つているのだろう。

「『ご飯できただわよー』

時々別の物事を考えながらペンを滑らせ勉強に励んでいた私に、下の階から私を呼ぶ母さんの声が届いてきた。それを聞いた私は「はい」と返事をして、階段を駆け下りる。階段を踏むたびにギシギシと木の軋む音が聞こえてきた。明るいオレンジの光が、部屋の中を照らしている居間へ行けば、父さんが「早く座りなさい」と私に勧めてくる。スープの入った鍋を持ってくる母さんは「冷めないうちに食べましょう」と言って微笑む。何時もの明るい食卓に、湯気の立つ料理。絶対に変わらない日常。そのはずなのに、どうして

今日は村で飼っている牛や羊たちの鳴き声が悲鳴のように聞こえるのかしら。

「ねえ、動物たちの鳴き声が聞こえない……？」

けたたましいほどに鳴いている牛や羊たちの様子が気になつた私は恐る恐る父さんに訊ねてみる。しかし父さんはほうけた顔をして「父さんには何も聞こえないな。母さんは聞こえるかい？」と母さんに訊ねた。父さんに話を振られた母さんは父さんと同じ様に「私も聞こえないわ」と言いながらも、顔を真っ青にさせていた。「人の様子を見ていると、私の中に『一人は何を恐れているのかしら？』という疑問がむくむくと膨らんできた。そしてその疑問に耐えきれなかつた私はガタンと座つていた椅子から立ち上がる。ちなみに私はよく「いらっしゃ性のない子ね」と母さんに注意されている。

「私、見てくる」

外の様子と、両親が恐れている『何か』の正体が知りたい私が外へ行こうとすれば、母さんが私の手を掴んで引き留めた。やっぱり母さんは外で何が起きているのか分つてているじゃない。私は答えのある隠しごとや秘密の類は知つてはいる立場に居ないと気が済まない質だと、一番一緒にいる人達はどうして分かつていないのである。

「今はまだ出ちゃダメよ！」

ぐい、と手を引っ張られた私はその場でたらを踏む。それと同時に父さんが私の目の前に出て「あいつは扉を開けなければ家に来られないんだ、だから」と、頼みこむようにして言つてきた。

あいつって誰？ そんな疑問も浮かんできたから、言葉にしよう

としたけれどその言葉は唐突にやつてきた小さな来訪者の言葉によって阻まれた。

「誰がそんな確証のないことを言ったのかな？ 僕は扉なんて開けてもらわなくても出入りぐらいできるんだよ」

家の扉を破壊し、「にたり」と子憎らしげに笑みを浮かべたその小さな人の正体は、私たちが住む村の子の一人だつた。だけど父さんと母さんは顔を恐怖の色に染めている。私たちが今、田の前にして「ここの子とは昨日もその前の日も顔を合わせていた筈なのに、どうして父さんと母さんはそんなに恐れているの？」

「君たちに会うのは五年と五日ぶりだねえ」

変わらず「にたり」と笑うその子の姿を見て、私は何故だらう、昨日も会つたじゃないと思う半面、嗚呼、懐かしいな、なんて場違いなことも思つてしまつた。私の頭はこの子の中身を覚えていないけれど、身体はしっかりと覚えている。だから、私はこの子と会つのが久しぶりだと思つたの。それに村に住むこの子の眼は空色と同じ水色ではなかつたはず。

「今更、何をしに来たんだ」

田の前にいる彼から私を庇うようにして父さんが私の田の前に立ちはだかる。その声は珍しく震えていて、やはり父さんはこの子が怖いんだということが明確に理解できた。でも私にとつてこの子は恐れるに足らない子なのに、どうして父さんはそんなに恐れているの？ 父さんはこの子の何を知つているの？

「何をしにきたかって？ 僕は対価をもらひに来たんだよ」

「どうして？ 私たちはちゃんと対価を払つたじゃない！」

私の腕を掴んで離さない母さんが私の耳元でそう呟べば、彼は顔を怪訝そうに歪めてため息を一つ吐いた。私の方は母さんが何を言つたのか理解できずに戸惑うことしかできない。

「君も何を言つているのかな？ 僕は君たちが自分の子供を助けるために他人の子を対価として売つたことを掘り返しているんじゃないよ。今、この村の村長が自分の孫を助けるために村人全員を僕に対価として売つたことを言つていいんだよ」

全く、この村の人間ときたらそれを理解するのに時間がかかるから嫌になっちゃうよ。と彼は言つて再び「にたあり」と笑つた。そういうえば、最近村長さんの孫が、私も一度なつたことのある特異な病気になつたと聞いた気がする。でも、この村の村長さんは優しくて、みんなのことを何時も考えてくれている人だから、私たちを売るだなんてことするワケないじゃない。なのに、私の腕を掴む母さんの力が強くなつているのはどうしてなの？

「それにしても、君たちって浅ましいよね。他人の子が苦しんでいる理由を知つているのに、平然と知らないふりをして『すぐに治るよ』なんて言つちゃつてさ。自分の家族のために他人の子を売つてだから自分の子にソレが返つてくるんだよ。嗚呼、でもこれはこれで人間の真理に忠実だから、世間としては認められないけれど、ヒトとしては十一分に認められるよね」

「どうじつ」と？」

嬉しそうに笑う彼の言葉を理解できないでいる私が小さく呟けば、

彼は少しばかり不満そうな顔をしてから再び口を開いた。

「キミはまだ分らないでいるみたいだけど、この村の人達は皆、自分の子の病を治すために他の子を僕に対価として売つていたんだよ。そして僕はその売られた子に、僕しか治すことのできない特異な病をかけたんだ。キミの親たちだってキミのために『そう』したんだから、ちゃんと理解して、自負しないと駄目だよ」

それでは今、治らぬ病にかかっている村長さんの孫に病を掛けたのは彼だけれど、そうさせた者の、原因の中には私の両親も入っているということなの？ 田まぐるしく回る頭の中。彼の言う言葉は分かつたけれど、これは理解しても良いのかしら？ ううん、私は理解しなくちゃいけない。そう覚悟を決め、彼の言っていた言葉を整理し、理解しはじめる。すると母さんが叫ぶようにして「逃げなさい！」と私に言った。

私の腕を掴んだまま後ろにいた母さんは私の手を引いてこの場から連れ出そうとするけれど、彼の言葉を理解した私はそこから一步も動かなかつた。何故なら彼が言った言葉と、彼のした行為を理解したうえで逃げる必要がないと悟つたからだ。彼は私たちという対価が欲しいだけなのでしょう？ それなら逃げても、奪われてしまふ結末に変わりなんて何一つ無いじゃない。むしろ、逃げた方が苦しくて辛い思いをするに決まっているわ。

「へへへ、それじゃあ対価を いただきます」

父さんを挟みながら見えた彼は、真っ赤なその舌でペロリと舌なめずりをする。それを見た瞬間、ゾクリと背筋に悪寒が走った。彼は私にこんな恐怖を与える子だったかしら？ そんな疑問だけが浮かんで私の視界は、まるで劇の幕が閉じるみたいにブラックアウト。

最後に聞けたのは父さんと母さんの声だったと細づ。

朝、目覚めると見知らぬ天井が目に入った。壁の隅にはクモの巣が張つたままになつており氣味が悪い。窓からは白い朝日が入りこみ薄暗い部屋を少しだけ明るく照らしている。それをぼんやりと眺めていると、昨日あつた出来事が脳裏によみがえってきた。此処は一体どこなのだろう。父さんと母さん、それに村の皆は生きているのだろうか。

部屋の外から香つてきたほのかな甘い香りとパンの匂いに鼻腔を刺激された私はすぐに飛び起きて、匂いが立つ方へと急いだ。家中はカビ臭く、灰色の塊となつた埃も隅に積もつてゐる。どうやら此処の家の主人は掃除と言うモノが苦手らしい。

私を誘う様にしていた甘い香りとパンの香りが一番濃い部屋に飛び込んでみれば、そこには薄汚れたキッチンで何かをしている、『女の子』の姿があつた。彼女はラベンダー色をしたワンピースと白いHプロンを身に纏い、機嫌よさそうに鼻歌なんかを歌つてゐる。

私がこの部屋に来たことに気付いたのだろう、彼女は私の方を向いて「おはよう」と幼い声で挨拶してくれた。でも、この声は間違いないく昨日私の家にやつてきた子の声と同じもの。それに、瞳だつて同じ綺麗な空色。昨日は村に住む男の子の姿をしていたのに、どうして今日は見知らぬ女の子の姿をしているのかしら。

「キミの分の朝食ならテーブルの上にあるから、遠慮せずに食べていいよ」

木で作られた茶色のテーブルを指差して笑む少女。まちがいない。この上から目線の物言いは昨日の子と同じ。でも、「どうして」という言葉が口から出てこない。それはきっと彼女の楽しげな鼻歌を聞いていたら訊ねてはいけない気がしたからだと思う。

彼女が指差していた粗末なテーブルの上には乱雑に置かれたカストリ雑誌や料理本。そしてその隣に取られていた小さなスペースには皿に乗ったパンとコップに入ったミルクが丁寧に置かれていた。何故こんな所に戦後直後に数多く出版されたという粗悪な体裁の大衆雑誌があるのか分らないが、多分彼女の趣味なのだろう。

机と同じ粗末な椅子に座つて温かいミルクを口に含めば、ほんのりとした甘さと乳臭さが口の中に広がる。相変わらず私に背を向けてながら何かを作っている彼女は一体どんな名前なのだろうか。

「ねえ、アナタの名前は何て言つの？」

私が彼女に名を問いかければ鼻歌を歌つていた彼女はぴたりとそれを止め、少しだけ躊躇うように声を発した。

「……ファース」

「ファースね。分かったわ。私は

「

名を教えてくれた彼女に私も名前を教えようと口を開けば「君の名前なんか知りたくないよ」と一喝されてしまう。「でも、知らないと不便でしょう?」と提案してもまた否定された。そしてそれ以上言おうとすれば鋭い目つきで睨まれる。この子は私を認めないのね。それならどうして私を此処に連れてきたりなどしたのかしら。私の名前さえ知りたくないと言うのなら、普通は連れてきたりはし

ないでしょ？

彼女が示した反応に少しだけ寂しい気持ちになりながら、私はテーブルの上に置いてあつたパンを齧る。しかしそのパンは思つてより水つけがなくパサパサしていて食べにくかつたため、私はすぐに入乳を口に含んだ。普通のパンならもう少し、しつとりしているのに。どうしてこんなにパサパサしているの。

そうだ、お父さんや母さん、村の皆はどうなつたのだろう。此処には居ない人達の顔を思い出した私は、「ねえ、村のみんなはどこへ行つてしまつたの？」とそのことについて知つてゐる筈のファー^スに再び問い合わせた。しかし彼女は「さあね、僕は知らないよ」と言つて鼻歌を再び歌い始めてしまつ。

彼女は知らないと言つたけれど、それは嘘に違ひない。だつて彼女は昨日私の家に来た子となんとなく同じだと感じるから。だけど私は、彼女が昨日の彼と同一人物だといえる確かな証拠を得てはいない。気のせいぢやない、違うよと彼女に否定されてしまえばそれでおしまい。その程度のものでしかないのだ。悔しいけれど、これ以上訊いたつて彼女は答えてなどくれないだろうから、私はフースの鼻歌を聞きながら無言でパサパサしたパンを口に詰めた。食事を終えた私はフースが一体何を作つているのか気になり、彼女の傍へ寄つてみる。キッチンのそばにいる彼女は乳白色をした液体を小さな鍋でぐつぐつと煮込んでいた。

「なあに、それ」

傍らにやつてきた私をちらりと見ただけで、彼女はまた視線を鍋に向ける。鍋から薄く香る匂いは何かの薬品のものだと分かるけれど……これは一体何なのかしら？

「嗚呼、これは特定の人だけ効く恋の妙薬だよ」

「……それってどういう意味？」

特定の人だけ効く恋の妙薬だなんて少しおかしな話じゃない。どうして万人に効かないのかしら？ その疑問を胸に抱きながら不思議そうな顔をすれば、ファーストは少しばかり呆れた表情をした後で笑みを作った。

「どうやらキミはひどく知りたがり屋さんみたいだね」

彼女の言葉に、「そうね、私は知りたがり屋だわ。だから教えて？」と答える。私は彼女の言う通り『知りたがり屋』なのだから仕方がないでしょう？ それに自分でわざとそうしているワケじゃないけれど何時だって私の頭の中は「何故」や「どうして」の言葉で満たされているんだから。

「カンタレラだよ」

一切の躊躇いもなく彼女の口から出た言葉は、知る人ぞ知る毒薬の名前。それを知っていた私はカンタレラと言つ単語を聞いた瞬間息を呑んだ。

「……どうしてそんな毒薬が恋の妙薬と言えるの？」

だって普通毒薬は人を苦しめるものでしょう？ 人を恋に陥らせる妙薬などには成りえないわ。だけど私の問い合わせ聞いた彼女は少し驚いたような顔をしてしばらく私の顔を見ていた。きっと彼女は私がカンタレラを知らないと思っていたのね。

「毒薬が恋の妙薬と言えるのは客が『そうなること』を望んでいるからだよ。自分の物にならないなら、命もろとも奪つて自分の物にしてしまえばいいと考えている。もつと努力すれば手に入る物なのかもしないのにね」

ファースは小さく笑つてまた鍋の中身をぐるりぐるりとかき回し始めた。そんなことを考えるお客様さんもお客様さんだけれど、それを作る彼女も彼女よ。どうしてそんな物騒な物を作つてしまつの？

「それはね、使う人が決めることだからだよ。僕はその道具を作つてあげればいい。紛いなりにも彼は人の子だから、人一人が持つ命の重みぐらい重々理解しているはずだらう？」

私は何も口にしていない筈なのに、ファースは私の内なる問いに答えてくれた。もしかしたら私は無意識の内に言葉として口に出していたのかもしれない。でも、彼女のこの答えは私には納得できなものだった。

道具を作るのは自分の仕事、それをどうやって使うかは客の自由。だから自分が作った道具がどのように使われようが彼女は認知しないし、責任も勿論とらない。むしろファースの答えは道具の悪用を唆すような答えで、それを聞いてしまつた私の気分は重くなつた。

「この重たくなつた自分の気分をどうやって晴れやかにしようか。そう思った私は部屋の中に光を取り込んでいる窓の方を見やる。そこから見えた風景は鬱蒼と茂る森で、此処が森の傍なのだと悟つことが分かつた。

「外に出てもいい？」

「構わないよ。行つてらっしゃい」

遠くまで行かないようにとか、毎までに帰つてきなさいとか、そんなことも言わずにファースは私を外へと送りだす。どうやら彼女は此処にきたばかりの私より、毒薬の方にご執心らしい。

小屋の周辺には森の木が生えておらず眩いばかりに燐々（さんさん）と当たつていた。それに村にあつた物より小さいけれど煙があり、畠仕事が好きな私は少しだけその煙をいじりたくなる。けれど私は家の辺りを見てみたいという自身の探究心に負けてしまい、煙から離れることにした。

ぐるりと家の周りを回つてみれば、煙と反対側には井戸があつて、裏には小さな花畠があつた。ただ暗くて、恐怖の対象になると思っていたこの森の中にもこんな落ち着いた場所があるなんて不思議だなあとthoughtしてしまつ。

そして、私のいる場所を取り囲むようにして生えている森の方に目をやれば、まるで森が「何もないから、こいつらにいで」と誘うようにして木々の枝をゆらした。どうしよう。この森は暗くて、入るには多少の勇気がいると思つけれど……。

そんなふうにして私の探究心を揺つて止まない森。自分の気持ちを抑えることができなくなつた私は勇気を振り絞つてその森に入つてみるとこととした。村に居た時は『魔女』が居るからと森に入ることを禁じられていたけれど、今は誰も禁じる人はいない。だけど私は森へと足を踏み込んでしまつたことをすぐに後悔した。

何故なら森に一步入つただけなのに、もう何十歩も森の中を歩いたかのような錯覚を引き起こさせられたから。森に入る前の場所から見た太陽は眩しいぐらいに燐々と輝いていたのに、一步この森に入つた場所から見る太陽は眩しさなんて微塵も感じさせてくれない。

外から見た森もとても鬱蒼としていたけれど、実際歩いてみると思つていた以上に暗く、不気味だった。地面には蛇や気味の悪い虫が通るし、頭上では姿の見えない鳥が鳴き声を上げている。

早く森の外から出なくては。そう思い直した私が今まで通つてきた場所を戻ろうと一步踏み出した瞬間、私は森の奥に一步足を進めていた。確かに私は森の外へ出ようと一步を踏み出したはずなのに、どうして。まるで、戻ろうとすればするほど森の奥深くに行つてしまっている。そんな状況に陥つてしまつたみたいじやない。

ありえない。頭ではそう分かつていても自分の身体は「こわい。こわい。もりが、こわい」と震える。その時になつて私はやつと大人たちが森に入つてはいけないと諭していた理由が理解できた。『魔女』が居る、居ないなどの問題ではない。森自体が入つた人間を逃がそうとしないから入つてはいけないのだ。

一步でも森に足を踏み入れてしまえば、森は決して入つた人間を逃がさない。外で見た枝の揺れは「何もしないから、こちらにおいて」と言つていたように感じられたのに、入つてしまつたら「逃がしはない」と言つてゐるみたい。傍に生える木々、木に纏わり付く薙、足元に広がる苔、全てが一丸となつて私にねつとりと絡みつく。勿論本当に絡みついているワケではないけれど、そうとしか思えない。

そんな恐怖や森の意思から逃げる様にして私は必死に走る。やつと森の外にたどり着いた時はもう、空には眩しいぐらいに輝く太陽はなく、星達が暗い夜空で煌きあつていた。

出来上がったカンタレラを瓶に詰めた頃には家の中から見える外は真っ暗になっていた。昼頃に起きてきた彼女は、カンタレラが毒薬だと知っていた彼女は一体どこへと行つてしまつたのだろうか。そう思いながら扉を開けてみれば、怯えたように震えるその子が居た。どうやら家の周りを囲う森に足を踏み入れてしまつたらしい。彼女の着てゐる服は所々破けていて身体中に傷をたくさん作つていた。

常人を受け入れたがらない、意地悪な森のことだから、彼女を酷く怖がらせてしまつたに違ひない。僕は一旦彼女を家の中に入れて、晩ご飯となる物を温め直すと同時に彼女の目の前に僕が普段使うとのない救急セットを置く。明かりの灯る室内に入った彼女は安心したのか、ホッと胸をなでおろしているようだ。

「僕は少しばかり出掛けてくるよ。昼前には必ず帰つてくるから好きにしていて良いよ」

程良く温まつた料理を彼女の前に並べた僕は、ちらりと瓶に入つた毒薬を彼女に見せて家の扉を開ける。後ろでは彼女が驚いたような顔をしているのが分かつていただけれど僕はそれを振り切るようにバタンと扉を閉めた。

彼女を酷く怖がらせたらしい暗い森の中に足を進める僕。常人ではない僕には、森はとても優しく、僕の歩く妨げになるような道は一切ない。

家に置いてきた彼女は昨晩僕が対価としてもらつた村人の一人だ。彼女は朝、僕に村の皆はどうなつたのかと尋ねてきたけれど、僕は知らない。いいや、覚える必要がなかつたから忘れたのだ。『魔女』の進むべき道に多少の犠牲はつきものだから、僕は今までと同じよう位に忘れた。それに僕は犠牲者ことをいちいち覚えていられるほど記憶力が良いわけでもないしね。

僕が黙々と歩き続ける森の上では月が輝いている筈なのに、僕の元にそれが届いてくることはない。しかし僕はそんなことについて森に文句を言うつもりはない。むしろこの森にお礼を言わなくてはいけないと思つてゐる。何故ならこの森のおかげで僕は安穩とした、何の不自由もない生活を送ることができてゐるからだ。

普通の人人が入ろうとすれば森は、この森にやつてきたばかりの彼女を怖がらせたのと同じようにその人達も怖がられ、迷わせてしまうから。『魔女』として異端視をされることの多い僕にとって、不必要な人間を排除するこの森は唯一の救いなのだ。

そんな森の中、僕はどんどん先へ行こうとするけれど身体の方はちつともついてこれやしない。このまま行けば絶対に時間に間に合わないと分かつた僕は、自身の身体を森に置き去りにして客の付近にいる子供の身体を使うことにした。因みにこれは憑依等と言う魔術めいたモノではない。唯、子供の身体に僕の自我を移しただけである。用が済めばすぐに離れるから『魔女』の呪いが感染することもない。

ひとつそりと子供がいる部屋から抜け出して、客の男が居るもう部屋の扉を叩く。勿論僕が使つてゐる子供の手の中にはカンタレラの入つた瓶がしっかりと握られている。

僕が叩いた扉から男が顔を出してきた男は「君は誰だい？」と問いかけてくる。その質問に僕が「『魔女』だよ」と答えれば彼はすんなりと僕を部屋に入ってくれた。部屋の中には机とテーブル、小さなランプとベッド以外何もなく殺風景である。

男は僕からカンタレラを受けると、とても嬉しそうな笑顔を浮かべて僕に「これでの子がオレの物になるよ。ありがとう」と礼を言つてきた。そして対価である「彼女への愛を綴つた手紙」を僕に渡す。渡された分厚い手紙は『魔女』が欲している「人間の心理」の中でも価値が高いものである。何せ、この男は酷く己の欲望に忠実だからね。

「また、機会があつたら会いましょう」という言葉を彼に告げ、部屋から出た僕は子供の身体を元在つた場所に返す。そして森に置き去りにしてきた身体の中に自我を戻し、再び森の中を歩き始める。

僕に毒薬を所望した男は秘伝の毒薬と謳われている『カンタレラ』の名を強調していたから、間違いなくその『カンタレラ』を使って人を殺めるのだろう。けれど、僕はその思惑を壊す。彼には悪いけれどあの瓶の中身はカンタレラなどではなく、仮死状態になれる薬が入っているだけなのだ。後日、彼女が死んでないと分かった彼は、思惑を壊された彼は。どんな行動を起こしてくれるのだろう。ヒトと言う生き物に興味が尽きない『魔女』にとつて、戸惑いや混乱は絶好の機会だ。

それに彼は愛しいヒトが欲しいと言つていたから、かのシェークスピアが作り出したロミオとジュリエットと同じく、奇しくも死ぬのは両方かもしれない。でもそれだけだつたら少しばかり余興じみていてつまらないなど、残念に思いながら歩を進めてゆく。僕も『魔女』も作り上げられた物語通りに物事が進むのはあまり好きじゃ

がないんだ。やっぱり物語はオリジナルでなくちゃ面白くないだろ？

そう思いながら夜明けを過ぎたころにやっと家へ帰れば、連れてきた女の子が黙々と畠仕事に勤しんでいた。畠の世話をやってくれと一言も言つていなかつたから、やらなくても良かつたのに。まあ、「好きにしていて良いよ」とは言つたけれど……彼女は畠仕事が好きなのだろうか？

それに、彼女自身が知らない物、例えば薬草の類には一切触れないのはとても良いことだと思う。これは思つていた以上に早く同じになれるかもしねりないな。

「畠の世話をしてくれてありがとう。後は僕がやるから君は休んでくれて構わないよ」

屈みこみながら畠をいじる彼女に僕がそう言えば、彼女は「いいえ。始めたばかりだから、まだ大丈夫よ」と笑つた。森をひどく怖いと思つてしまつた彼女にとつて、こうやって気を紛らわしている方が良いのだろう。

「そう。君がしたいと言つのなら、そうしてくれて構わないよ」

彼女にそれだけを言つと僕は家の中に入り、対価としてもらつた分厚い手紙を自室のタンスの中に入れ、朝食をとつてから動きやすい格好になる。それに、僕は『魔女』の力によつて眠りを必要としない身体を手に入れてしまつたため、休息を取る必要もない。

そのことをなんと便利な身体だろうと多くの人は思うかもしれないが、眠りを必要としない身体だからこそ、長い間僕は眠るという

行為をしていない。勿論眠ることもできないから夢を見る 것도できぬ。ただひたすら僕はつまらない夜を過ごしてきたのだ。

扉を押して再び太陽の輝く外に出ると、畠仕事に精を出していた彼女が立って、家から出てきた僕を見た。

「ファースも畠仕事するの？」

「そうしないと食べ物がなくて困るだろ？？」

それもそうね。と彼女は小さく笑つてまた屈みこむ。僕は薬草の世話とする為にジョウロと軍手を持って作業に取り掛かった。

そして僕らは間に休息を挟みながら、畠の世話から家の部屋の掃除までした。掃除の方は殆ど彼女がやってくれたから助かった。僕自身はあまり掃除などが得意ではないので、日頃掃除をしていなかつた家の中は見違えるほどに綺麗になっていた。

そうこうしているうちに口もどつぶり暮れて、彼女と僕は一人で食卓を囲む。相変わらず彼女は質問ばかりしてくるけれど、僕にとつてそれは苦にもならない。

「どうして私の名前を聞かないの？」

「知る必要がないからだよ。むしろ邪魔になるから尋ねもしない。君が僕の名前を知っているだけで十分なんだ」

深い理由は僕の中に不必要的彼女の自我を発生させてしまう恐れがあるからだ。それに僕に成り代わる可能性を秘めている彼女にも迷惑は多く掛けられない。彼女には彼女のままじゃなくて僕に成り

代わり、『魔女』になつてもらわなくてはいけないからね。

一人だけの小さな食事を終えてから、僕は彼女に「おやすみ」の挨拶をして自室へ戻る。故意的な明かりもない部屋は、窓から差し込む月の光で照らされ白と黒のコントラストが綺麗に生えている。

そしてその夜、僕はある男が死んだということを知った。昨晩僕がカントラレラを……いや、仮死状態になれる薬を渡したあの客だ。どうやら彼が欲していた女には恋人がいて、その恋人にナイフで胸を一突きされたらしい。女を求めていた男は世間的にも疎ましい人間だったらしいから、彼女の恋人が罪に問われることはないようだ。全く、人殺しをした人間が無罪というのは変な話じやないだろうか。

因みに僕がそれを知るに至ったのは、昨日の今日で彼がどのような行動に出たのか気になり昨日と同じ子に移つたから。僕が移つたその子の傍に運良くあつた新聞が小さくそれを記していたのだ。

ずいぶん早い展開だと嬉しく思いながら、少しばかりつまらなくなつてしまい落胆する。あの男は自分の心を制御しきれていない所が気に入つていたから、死んだと知つたら少しだけ、そう、ほんの少しだけ悲しくなつていたんだ。

タンスの中に入っていた対価の戸が身を取り出して、ベッドに戻る。そして慎重にその封を切ると、分厚い封筒の中からは大量の髪の束が出てきて、白いシーツの上に一気に広がり散らばった。

手紙の一枚一枚には丁寧にかつ、黒いインクでびつしりと彼女への愛が綴られていた。「愛しているよ」の言葉は勿論、「キミのそ

の乳白色の髪は、まるで砂糖菓子の様に甘く、オレをとろけさせるだろう」「キミの白い顔に栄えるように在る宝石のような青い眼と

薔薇の様に赤い唇は、何物をも陶酔させるだろ？」「嗚呼、オレは何時もキミを見ているよ」「キミにどんな男がいようと、オレは決してあきらめはしない」「何故ならオレが、君をこの世で一番理解しているからだ」なんていう、恥ずかしい思い違いと犯罪臭が入り混じった言葉も書かれていた。

愛情のたっぷりと込められたその手紙を読んでいると、僕はあるでそれを遺言の様だと思った。言葉の一つ一つが彼の最期の言葉で、愛しい女を手に入れる為に、『魔女』である僕に頼みこむほどに、彼は彼女を愛し、欲していたのだ。

そんなにしてでも、彼女を手に入れたかったのならば、君が死んだ今、私が君の為に彼女を捧げようではないか！

僕の中に居て、滅多の事では自己主張をしたがらない『魔女』が思い立つたようにそう僕に囁きかけてきた。それに、多分『魔女』の差す「君」はこの手紙をカンタレラの対価としてくれた男の事だらう。よほど、『魔女』は彼の事がお気に召したらしい。

シーツに広がる手紙の上に身体を寝そべらせ、木で造られた天井を見やる。

まず手始めに彼の邪魔をして、彼を殺した男を自害させよう。人間、幾らでも身に疾しい事はしているのだし、君を殺した人間を裁かなくてはいけないだろう？ そしてそれが終われば彼女の番だ。彼女には君を思いながら彼と同じ場所に行つてもらおう。毎日この手紙を彼女に贈るのが手つ取り早いかもしれないね。

彼女への愛を詰め込んだ手紙を書いて死んでいった彼と、僕の中に潜む『魔女』が喜びそうな計画を立てていると、何だか僕自身も

楽しきなってきた。早速明日からこの計画を始動させてゆくことにしよう。

「じりりと寝がえりを打てば頭部に在った手紙がカサリと鳴つて、まるで自分を読めという様に黒い字をこれ見よがしに見せびらかしてきた。そんな自己主張の激しい手紙を一拍置いてから閉じ、僕は瞼をおろして黒の世界を見る。

僕の中に在り、僕に「人間の心理」を知るよう促す『魔女』には形や姿が無い。例えるならば自我を持った噂だろうか。しかもこの『魔女』は噂の割には特異な力を持つているのだが、質の悪い事にも『魔女』に成り代わった人物の身体を腐食させ、死滅させるという厄介な代物まで抱えこんでいるのだ。きっと途中で、何かの呪いにでもかけられたのだろう。

だから紅い頭巾を被つた『彼女』が僕に成り代わって自身の腐食と『魔女』の死を止めたように、僕も『彼女』と同じようにして『魔女』に適した子供を探し、成り代わっているのだ。

しかし、成り代わることが出来たとしてもその身体の持ち主の自我が残る事は滅多にない。たまたま僕は先代の『魔女』である『彼女』よりも自我が強く、『魔女』に適していたから『彼女』の代わりにいるのだけど、普通は消えてなくなるだけである。そんな僕の自我は幾年月を重ね、何度他人に成り代わっても消えることは無かつた。長い間『魔女』であつた僕は、『魔女』であり続けることにほんの少しだけ疲れていた。

そしてその長い間の内で、僕は繰り返し試行錯誤をし、これまでの経験と失敗から得た正しい『成り代わり』方を導き出した。それがこれだ。

協調し、侵略する。同じことをして、同じ考え方を持つて、同じ感情を抱く。時には相手から干渉を受けて自分を同調させる。妥協をすれば同調し同じになることは叶わない。

一旦僕と同じになってしまえば、僕が掲げる理論の上において同じ人間が一人いることになる。そしてその内の一人から僕の自我を更に超える、強い自我が発生するかもしない。それが僕自身の自我なのか、彼女の自我なのかは『魔女』が決めることだ。

しかも僕が連れてきた彼女は僕以上の探究心と大きな好奇心を持つているから、探究心が皆無に近い僕なんかより、ずっと『魔女』になれる確率は高いと思う。だって「人間の心理」を知りたがる『魔女』には探究心と言う代物が必要になつてくるはずだからね。

それに前提となる『協調』という行為自体が自我の崩壊だと言うのなら、それもまた一興だと思う。人間はいろいろなことを失敗してから真実を知る権利を得られるから、また次頑張ればよいだけの話だ。何せ僕には成功するまで永遠にチャンスが与えられているのだから。

そうして夜が明る中、僕は彼女と自分を同じ人間にすることにならどんな努力も惜しまないと決めたのだ。

まずは彼女が僕に、僕が彼女になる為に、彼女に『魔女』を教え、彼女が僕になりたがるように、彼女が僕を羨望するようにしなくてはいけないね。

結局のところ僕も彼女も『魔女』が主人公を務め、『魔女』自身が造り出した舞台の上で戯れているにすぎないのだけれどね。

ひらひらと白いカーテンが揺れて外からの優しい風を小刻みに部屋の中に取り込む。そんな中、私はコトント木の机の上に飲み物が入ったカップを二人分置いて、ファースの向かいにある椅子に腰掛けた。すると目の前に居るファースが手元のカストリ雑誌をめくりながら口癖のように「姿のない『魔女』は人がどのようにして生きていいくのか、とても興味があつたらしくてね、『魔女』はいろいろな人の身体を移りながら今でも僕の中で生きているんだ」と言葉を発して、パタンとカストリ雑誌を閉じた。

私が此処に来てしばらく経つた後から彼女は自分のことだけなく、魔女の話を頻繁にするようになっていた。それに今回の話の内容からも分かるように、どうやら彼女は自分のことを『魔女』だと思っているらしいの。私が元々持っていた持論としては『魔女』などと言う非科学的な者は存在しないということだつたけれど、彼女が本当に『魔女』であると言うのなら、彼女がたまに作る薬や理解しがたい持論の説明などの少しだけ変った行動も頷ける。

勿論、彼女はどこか変わつていると私も思うけれどそんな所がフアースらしく、理由は分からぬけれど私も同じになりたいと強く思つてゐる。信仰心の乏しい私だけれど、この感情はきっとその信仰心にも似たものだと思う。いいえ、信仰心に違ひないわ。

それに短い間であつたけれども、私はファースについてのことをほとんど知つていた。そして彼女は私のことを知るだけでなく理解までもしていた。そのおかげなのか、唯の錯覚なのか分らないけれ

ど、まるでファースは私に、私はファースになれる。そんな錯覚まで引き起こしてしまって、互いを知りつくしていたの。

元はまったく違つものであつたのに、今では同じ。同じことをして、同じ感情を持つて、同じモノを共有しなくちゃあ我慢が出来ない。そんな日常が当たり前になつていて。もし他人がそれを見ていたら気持ち悪がるだろうけれど、生憎此処には他人と言う者は存在しないから、咎める人はだれ一人居ない。むしろ、咎める人間が居たとしても意味はあるでないと思う。だって、ファースと同じにされるつってとても幸せなことじゃない？

そんな強い信仰感と陶酔を持った私は、ある日ファースの腕がシミに蝕まれていてことに気が付いた。彼女の首元と長袖に包まれた腕は、指を残し真っ黒なシミに侵されていて醜い。彼女は「戒めだよ」と言つていたけれどこれが戒めで済むものか。呪いの類に相違ない。

そう、私が信仰し、同じになりたいと願い、陶酔していた彼女に残されているのは指と、首から上の顔。たつたそこだけ。日々醜くなっていく彼女を見ていると私はとても悲しくなつた。それに彼女は私が抱く信仰心の対象なのだから、穢れてなどいけないと思うのもし穢れ続けてしまうというのならば、彼女の時を止めてしまおう。彼女に『成り代わつて』しまおう。

少しばかり狂気じみた自分自身の考えには「何故？」という疑問は語りかけてこない。それはきっと、私がファースになりつつあるからなのかもしれない。だって彼女は自分自身の行動を「何故？」だなんて思わないでしょう？

だから今日、私は、完全に穢れて消えてしまうファースを助ける

ことにしたの。以前彼女が作っていた毒薬のカンタレラを彼女の飲み物に混ぜて、彼女の時を永遠に綺麗なまで止めておく。

カストリ雑誌を膝の上に置き、カップに手をかけたファースを見つめながら、私はカンタレラが入ったカップに彼女が早く口づけないかと、心臓を激しく鼓動させ私はファースの話を聞き続けていた。

そしてファースがカップに口づけ、中身を嚥下した瞬間私は心中で歓喜した。これで彼女は綺麗なまま永遠を手に入れ、私は彼女に成り代わることができる！ そんな歓喜の中、ファースは椅子の背もたれに自身を預け、眠るように目を閉じて首を頃垂れさせた。

その瞬間、彼女の手元にあつたカップがそこから離れ、床に落ち、大量に在つた中身を床にぶちまけさせる。ファースの膝の上にあつたカストリ雑誌は彼女が態勢を崩したせいで、ぶちまけられた飲み物の上に落下し、文字をじんわりと滲ませた。

しかし私はそれを片付けもせず、息を殺しながら彼女の呼吸と手首の脈を測る。どうやらこのカンタレラは即効性の物だつたらしく、彼女はすでに脈もなく息絶えており温もりも徐々に遠のいていた。

その事に止めどもない喜びや悲しみを感じた私は、自身を落ち着かせ、それをちゃんとした現実として受け入れる。これでファースは完全に穢れて消えてしまつ前に死を迎へ、私は彼女に成れた。成り代わることが出来た。喜びで、顔の緊張がゆるみ笑みを浮かべている事が自分でも分かり、身体が高揚し熱くなる。これからどうやつて彼女を演じよう。そう思った瞬間ピクリとファースが動いた。

どうしてファースが動いたの？ 彼女は脈もなく、温もりもなくなり、呼吸もしていなかつた。なのに、どうして彼女は動いたの。そんな疑問が私の頭の中を駆け巡り、震える身体を押さえつけられ

なくなつた私が傍にあつた陶器でファースに危害を加えようとすれば、彼女はパチリと瞼を開いて唇を動かした。

「

」

ファースが、いいえ、『魔女』が何を言つたのか分らない。聞こえるのは自分自身が発する悲鳴にも似た絶叫だけ。私はファースに成りたかつた。いいえ。ファースに成ることは出来た、それだけの筈なのに。たつたそれだけの筈だったのに。どうして私はこんなにも『魔女』とは違つっていたのかしら。

かくして私はファースに成り代わることもなく『魔女』が主人公を務める笑劇から退場を強いられたのである。

「『あなたがほしい』」

またしても次世代の『魔女』にそう言つた『魔女』は、僕の自我を保つたまま彼女を乗っ取るに至つた。

しばらくの間、共に暮らしていいた彼女がどんな人間なのか僕は理解していたし、彼女の中で僕は信仰の対象であつたのも知つてゐる。それに、最後に一度だけ僕と同じになれたことはとても喜ばしい事である。

僕が求めた通り彼女は僕になるという願望と錯覚を抱いていたから、彼女が僕に何をするかなんて僕にはお見通し。だから僕はあらかじめカンタレラと偽つていたあの毒薬を無害な液体に変えておき、それが混ざつた飲み物と共に嚥下したのだ。

彼女は一度、僕が死んだかどうかを確かめる為に呼吸や脈を測つていたけれど、呼吸は止めれば何とかなるものだし、事前に小さめのボールを脇に挟んでおけば一応脈は止められる。

そんな初步的なトリックに騙された彼女は僕の自我を越えるには至らなかつたらしく、僕が彼女の身体の中にはいつてしまふと彼女の自我はあつという間に消え去つてしまつた。

せつかく同調して同じ人になつたのに、僕の中に巣くう『魔女』

はどうして僕と同じになつた彼女をいとも容易く跳ねのけてしまったのだろうか。今回は名前を聞かずにいたから大丈夫だと思つたのになあ。

まあ、この失敗から新たなる「正しい成り代わり方」を導き出すことができるのだから、気に病むことなど一つもない。

嗚呼、でも今回の彼女は探究心も好奇心も旺盛だったから『魔女』が求める身体にぴったりの逸材だと思ったのだけれどなあ。『魔女』は一体どのような子が好みなのだろうか？ もしかした僕みたいな男の子が適しているのかな？ 彼女のおかげで少しだけ「知りたい」という気持ちが出てきた僕は、疑問符ばかり彼女の頭の中の記憶を探つてみる。

どうやら彼女が住んでいた村では、僕が居る森は『魔女』が居るから入つてはいけないと諭されていたらし。彼女は森が怖いからだとずつと思っていたようだけれど、大人たちの言つていることは正しい。何故ならこの森の中には『魔女』という僕が住んでいるのだからね。

今まで僕が使つていた身体から距離をおき、傍にあつた椅子に座る。ラベンダー色のワンピースに白のエプロンを着たままピクリとも動かないその身体を彼女の身体から眺めれば、首元には黒いシミがびつしりとあり、自分の目で見るよりも醜く見えた。そして、それと同時にこの身体の本来の持ち主である彼女が、このシミから僕を救おうとした事は『ごく普通の考えだつたのかも知れない』と思はじめた。

彼女の思考を辿つているとフワリと窓から風が入り込み、そつと僕の髪を、僕が成り代わった彼女の髪を揺らした。僕が成り代わつ

た彼女の髪は思っていたよりも艶があつて綺麗だつたけれど、髪と一緒に見えた指は元来土いじりが好きだつたせいか節くれ立つて何だかみつともない。でもこれはこれで彼女らしいな、なんて思つてしまつた僕は、思わず彼女の口を使ってクスリと笑つてしまつた。

僕は彼女で彼女は僕で、だけど、彼女は『魔女』には成りえなくつて、僕は長い間『魔女』を引き継いでいる。そんな僕は何時になれば『魔女』の笑劇から退場出来るのだろうね？

演技さえ必要のない舞台は、何時だつて形のない主人公である『魔女』の手中にあつたんだ。

6（後書き）

前もつて読んで下さった方から「わかりづらい」との叱咤（苦笑）を受けましたので少ないので補足を入れさせてもらいます。

『F a r c e』：笑劇、道化芝居、茶番、無駄でばかげたこと。

『魔女』：人間の真理を貪欲に知りたがる者。姿のない自我。噂。特異稀な力と成り代わった者を腐食させる力を持つ。

『彼女』：『魔女』に成り代られた（自我を受け継がれた）真紅の頭巾を被っていた少女。ファースの先代。

『僕』：『彼女』から『魔女』を受け継がされた男の子の自我。現在在『魔女』の欲望を叶えるため客と取引をしたりして人間の心理を知ろうとする。それと同時に『魔女』を途絶えさせぬように『魔女』の力を使い『魔女』に適した者を探す。

『森』：普遍的な人間を疎み、足を踏み入れると外に出られる確率は低い。現在は普遍的ではない『僕』を好み、彼に住む場所を提供している。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5002ba/>

魔女と笑劇

2012年1月13日22時55分発行